

王朝文学文化研究会 土曜部会
平成二三年一月一五日 学部四年 田辺ゆかり
『古今和歌集』四二番歌

【本文】

①初瀬に②まうづることに、③やどりける人の家に、④ひさしく
⑤やどらで、程へて⑥後に⑦いたれりければ、⑧かの家のあるじ、
「かくさだかになん⑨やどりはある」と、⑩言ひだして侍りけ
れば、⑪そこにたてりける梅の花を折りて⑫よめる

つらゆき

人はいさ心も知らず ⑬ふるさとは 花ぞ昔の香ににほひける

【校異】※『片桐全評釈』

①初瀬に…はせでらに《筋》、はつせへ《関》、はつせのてらに
《公》②まうづる…まうでける《関》③やどりける…れいやどる
《筋》、れいやどりける《元》④ひさしく…ひさしう《筋・唐・
六・永・前・天・伏・寂・経》⑤やどらで…まからで《経》⑥後に
…ナシ《元・筋・六・永・天・経》⑦いたれりければ…まかりたる
に《元・筋》、⑧かの家のあるじ…ナシ《元・筋・六・永・天・
経》、かのあるじ《公・関・俗・静・高》、⑨やどり…やど《元・
筋》⑩言ひだして侍りければ…あるじいひいひだしたれば《元・筋》、
いひいひだしたりければ《関・俗・静・六・永・前・天・伏・高》、
（※いひいだして侍（り）ければ《片桐全評釈の本文》⑪そこにた
てりける…そこなる《元・筋》⑫よめる…ナシ《元・筋》、よみて
いれける《公》、⑬ふるさとは…んめの花《関》

【他出】※『片桐全評釈』

『貫之集』八一四*（『私家集大成』…正保版本七九〇・伝藤原行
成筆貫之集切一人）、そして藤原定家撰の『二四代集』『百人秀歌』
『百人一首』『詠歌大概』に引かれている。

*『片桐全評釈』が引いた『貫之集』は『新編国歌大観 第二卷
私家集編一』が所収した陽明文庫蔵本。

【語釈】

◆初瀬…奈良県桜井市にある長谷寺のこと。女性を中心に都の貴族
たちが多く参詣し、『源氏物語』等の文学作品にもその名
が見られる。

◆あるじ…この家の主は女性であるという説がある。（→【鑑賞】）

◆さだか…『岩波古語辞典』には「《事実として動かすべくもない
状態。（略）《事実として公式にはつきりしているさま。
確実》とある。

◆言ひだして…「出（だ）す」は「出（いで）」の他動詞形「出
（いだ）す」の「イ」が脱落した形。「言ひ出（い
だ）す」は、『岩波古語辞典』によると「《言葉を
外に出す意。『言ひ入れ』の対》①家や部屋の内か
ら外の人に向って言う」意。ここから、この歌が詠
まれた時、貫之は屋外に、「あるじ」は部屋の中に
いたと考える事が出来る。

◆いさ…感動詞、もしくは、副詞。相手の言葉をやんわりと否定す
る語であり、この歌においては、後ろに「知らず」を伴う
ので「さあ…わからない」の意。

※『岩波古語辞典』（感動詞）と『日本国語大辞典第二版』
（副詞）の「いさ」の用例には『古今集』六三〇番歌が用例
として引かれている。

※『日本国語大辞典 第二版』…「副」①下に「知らず」の意
の語を伴って用いる。さてわからない。どうだか（知らな
い）。（用例に古今四二〇②下に否定的な表現を伴って用い
る。どうも（…できない）。とても（…しがたい）。どうせ
（…したところで）。③「知らず」の意味を含ませて用いる。
さあどうだか知らない。わからない。上代、「に」を伴って
も用いた。

【語誌】（一）本来は相手の発言をさへぎる、「よくわから
ないこと、答えかねることをたずねられた時に、返事をあい
まいにするための、さしあたっての応答のことば」（『日国
大』「いさ」「感」①）であったのだろうが、否定の気持が
発展して「肯定しがたく承服しがたいことを言われた時に、
相手の発言を否定するための応答のことば。「いさとよ」と
いう形をとることの方が多し。いいえ。でも。だって」
（『日国大』「いさ」「感」②）のような、「いな」に近い
応答詞となり、かつ（先述のような）副詞となる。一方、歌
にとり入れられて、形も複雑な派生形を作り、意味も微妙に
なってくる。

◆ふるさと…現代語の「生まれ育った土地」という意味ではなく、

「昔馴染みの土地」。『貫之集』には次のような歌がある。

三月つこもり

花もみな散りぬる宿は行く春の

ふるさとこそそなりぬべらなれ

この歌の「ふるさと」は春が「訪れて去った場所」であり、「ふるさと」にそのようなニュアンスがある事が伺える。また、『新大系』には「荒れ果てるもの」。

劉希夷・代白頭吟の詩想に学ぶ」とある。

◆むかし：最も古くは、なつかしい故人や自分が実際に体験・見聞した過去のことをいい、遠い時代のことと近い時代のことも指す。（『岩波古語辞典』）

【鑑賞】※『貫之集』の引用は『貫之集全釈』による

四二番歌から四八番歌まで、現在の梅の姿や香からいつか見た梅に思いを馳せる歌が並んでいることから、『古今集』は、目の前にある梅の枝を折りながらかつて見た梅を想起している歌として、この歌をここに置いたと考えられる。

この歌の解釈の問題として、「人」に対するものは「ふるさと」なのか「花」なのかが挙げられる。前者は、詞書の「あるじ」の「かくさだかになんやどりはある」という発言を受けて、「人は変わるが、ふるさとは変わらない」とし、梅の花を昔のままであるふるさとの象徴として捉えたものと考えられる。しかしながら、『新大系』が引いている劉希夷・代白頭吟には「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」とあり、貫之がこのような漢詩の世界を歌に取り入れた可能性を考えるならば、後者の「花」の方が適しているであろう。『片桐全評釈』に指摘がある通り、『古今集』では、花はうつろいやすいものとして詠まれることが多い印象があるので少々矛盾しているようにも感じられるが、うつろう花といった場合の花は桜や心の花であることが多いのではないだろうか。

また、大岡信氏は『日本詩人選7 紀貫之』で、「あるじ」が部屋の中から貫之に声をかけているシチュエーションとこの歌の返歌として「花だにもおなじ心に咲くものを植ゑたる人の心知らなん」という歌が『貫之集』に取られていることから、家の主は女性であると考え、この歌を男が女に「心があてにならない」と詠みかけたものと解した。このような解釈に対し、異なる立場を取る『竹岡全

評釈』の著者竹岡正夫氏は、『貫之集』に取られている「人はいさわれは昔のわすれねば物へと聞きてあはれとぞ思う」の歌や『土佐日記』の記述を根拠として、「人の心もいさ知らず」は「貫之の人生観を表わす常用の発想法であった」と同書に記している。

【通釈】

初瀬に参詣するたびに宿泊した人の家に、長い間宿泊していなかったが、月日を経た後に訪れると、その家の主が「このように確かに（変りなく）宿はある」と（部屋の中から）と声をかけてきますので、そこに立っていた梅の花を折って詠んだ（歌）

人は、さあ心さえもわから（ずあてになら）ないが、（来ない間に寂れてしまった）昔馴染みのこの場所は、花だけがかつての香りのままに咲き誇っているのだなあ

【配列】

四一 春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるゝ
四二 人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香にほひける
四三 春ごととに流るゝ河を花とみて折られぬ水に袖やぬれなん

姿が見えない夜の梅の香を詠んだ四一番歌の流れを汲み、四二番歌では梅の「昔の香」を詠み込んでいる。続く四三番歌は川辺で水に移った梅を折ろうとする歌で、この歌の第一句は「春ごとと」である。四二番歌と四三番歌は、どちらも実際に咲いている梅を目前に、過去に見た梅の姿に思いを馳せている歌であることから、「ふるさと（古る里）」と「流るる河」、あるいは「昔」と「春ごと」の語で繋がっていると考えられる。

【参考文献】※○内はレジュメに用いた略称

片桐洋一『古今和歌集全評釈』（『片桐全評釈』）一九九八 講談社／竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（『竹岡全評釈』）一九八七 右文書院／小島憲之他『新日本古典文学大系』（『新大系』）一九八九 岩波書店／田中喜美春他『貫之集全釈』一九九七 風間書房／目加田誠『唐詩選』一九六四 明治書院／大岡信『日本詩人選7 紀貫之』一九七三 筑摩書房／小沢正夫他『新編日本古典文学全集』一九九四 小学館／奥村恒哉『新潮日本古典集成』一九八四 新潮社／小町谷照彦『古今和歌集』二〇一〇 筑摩書房
辞書・辞典：『日本国語大辞典 第二版』（『日国大』）・『岩波古語辞典 補訂版』